

診を進められ、紹介来院した。

既往歴：平成10年 左側下顎骨髄炎

家族歴：特記事項なし

現症：右側耳前部の腫脹を認めた。腫脹部は弾性硬で表面皮膚正常色。自発痛・圧痛は認めなかった。

【結果および考察】初診時CTにて右側下顎頭外側に1つ、右側耳下腺内に4つ、上内深頸部に1つの病変を認めた。耳下腺内病変はいずれも境界明瞭な類円形で、内部不均一な造影性を認めた。MRにて右側耳下腺内の複数の類円形病変はいずれもT1で筋よりもやや高いintermediateからhigh intensity, T2で脂肪と同程度のhigh intensityで境界明瞭だった。耳下腺内上方の病変は多房性で、内部にびまん性に造影される領域を認めた。その他の病変はやや不均一な造影性を認めた。また右側耳下腺上方の下顎頭外側に境界明瞭な類

円形病変を認め、耳下腺内病変と同様のintensityを呈した。さらに右側上内心頸部に直径10mmのやや弱く造影される病変を認めた。超音波検査では側頭部および右側耳下腺内病変はいずれも境界明瞭な類円形で内部均一、底面は明瞭、後方エコーの上昇として認めた。Gaシンチでは右側側頭部から耳下腺部、顎下部にかけての範囲に鼻腔よりも弱く、健側耳下腺よりも強いGaの集積を認めた。SPECT画像からもCT, MRで認めた病変相当部での集積が確認された。唾液腺シンチでは病変相当部へのTcの強い集積や欠損像は認められなかった。また右側耳下腺の機能的な異常所見も認めなかった。

これらの検査終了後に生検が行われた。本症例の画像的な特徴について文献的考察を加えて報告する。

### 鼻口蓋管嚢胞の早期診断法の試み

○佐野友昭, 田中力延, 大西 隆, 飯沼英人, 藤原秀光  
細川洋一郎, 矢嶋俊彦\*  
北海道医療大学歯学部歯科放射線学講座  
\*口腔解剖学第一講座

【目的】今回、我々は正常と考えられる切歯孔と大口蓋孔の大きさを比較することにより、鼻口蓋管（切歯管）嚢胞の早期診断法として大口蓋孔の大きさが応用できないか検討した。

【方法】対象は北海道医療大学医科歯科クリニックを受診した110名（男性46/女性64）で、年齢は12歳から78歳（平均36.4歳）であった。CT撮像条件はガントリーを咬合平面と平行にし、断層厚は1mmとした。大きさの測定は撮像範囲の軸面像において最初に明らかかな切歯孔ならびに大口蓋孔の外形を認めた位置で前後方向（長径）と左右方向（短径）の距離を測定した。

【結果および考察】切歯孔の大きさは、長径は平均3.5mm、短径は平均3.4mmであった。大口蓋孔は、右側は長径平均4.9mm、短径は平

均2.2mm、左側は長径平均4.9mm、短径平均2.0mmであった。左右の有意差は長径では認めなかったが短径で認めた。切歯孔ならびに大口蓋孔の長径において、両者の相関が最も高かった（ $R=0.41$ ）。そこで、切歯孔長径の+1SD群（4.5mm以上）と-1SD群（2.4mm以下）の大口蓋孔長径の大きさを比較したところ、両群との間で有意差を認めた（ $p<0.01$ ）。

【まとめ】切歯孔の大きさが大口蓋孔の大きさと相関し、日常の画像検査で大きな切歯孔に遭遇した場合に大口蓋孔の大きさから切歯孔の病態を推量する指標として使える可能性を有すると考えられた。

### 歯根破折における接着性根管充填シーラーの有効性

○阿部博明, 湯本泰弘, 伊藤修一\*, 森 真理, 斎藤隆史\*, 古市保志  
北海道医療大学歯学部歯科保存学第一講座  
北海道医療大学歯学部歯科保存学第二講座\*

【目的】垂直破折した歯は、その部位の歯周組織の破壊を引き起こすため、抜歯となることが多い。垂直破折歯の保存的療法として意図的再植術を応用した接着性レジンセメント（スーパーボンドC&B<sup>®</sup>, サンメディカル）による破断面接着法があり、長期間保存可能な症例の報告がされてきた。

近年、樹脂含浸層や象牙細管内へのレジntagの形成による辺縁封鎖性や接着性の向上を意図した各種接着性レジン系シーラーが開発されており、スーパーボンドシーラー（サンメディカル）もその一つである。その封鎖性は従来型の非接着性シーラーと比較して優れており、流動性が高いことが報告されている。それ故に、保存的療法を試みた縦破折歯の根管充填時において、特殊な外科処置を行うことなくその破断面の接着に応用できる可能性が示唆される。

本研究は、歯根縦破折における接着性根管充填シーラーの有効性について検討することを目的とした。

【材料・方法】当クリニックを来院し、歯根縦破折を認める患者さんに接着性シーラーを応用した保存的治療方法を説明した。同意を得られた3名に、GCガッタパーチャポイントとスーパーボンド根管充填シーラーを用いて根管充填し、経過観察を行った。また、in vitroで縦破折モデル（単根歯）を作成し、象牙質接着界面の性状を走査電子顕微鏡で評価し、微小引っぱり試験を行った。

【結果・考察】臨床症例では、根充後3～12ヶ月において歯周組織の状態は安定しており、良好に経過している。

接着界面のSEM観察では、スーパーボンドシーラーの接着システムにおいて健全象牙質で緻密な樹脂含浸層が観察され、強固に接着していることが確認された。微小引っぱり試験においても平均して約10MPaを認めた。

本研究結果より、歯根破折した歯への接着性根管充填シーラーを用いた根管充填の有効性が示唆された。